再び夢へ 前向く力くれた

京都外大4年・吉村さん「立ち止まっても、また走ればいい」

かける思い 下

京都マラソン2022



京都マラソンを完走した吉村陽花さん＝右京区



コロナ禍 諦めず就活

止まっても、また走り出せばいい。京都外国語大4年の吉村陽花（はるか）さん(24)はそう前を向く。夢を失いかけ、ふさぎ込んだ時もあった。再び前を向くきっかけが京都マラソンだった。

中学の時にホームステイでマレーシアを訪れ、英語に興味を持つようになった吉村さん。大学に入ると、外国人観光客でにぎわう京都市内の薬局でアルバイトを始めた。得意の英語で商品説明をすると同僚にも感謝され、「誰かの役に立っている」と自信が持てた。能力を生かせる航空会社への就職を目指すようになった。

そんな日算はコロナ禍で崩れた。

一昨年春から大学に行けなくなった。感染対策で授業のほとんどがオンラインになったためだ。「ずっと家でパソコンの前にいました」。3年生になってからの約2年間、大学で授業を受けたのは計10日間ほど。顔を思い出せない友人や先生もいる。利用者が激減した航空会社の多くは新卒採用を断念。バイト先の薬局もいつの間にか閉店していた。

「夢はかなわないなと落ち込みました。頑張っても無駄。就職できないかも。マイナス思考ばかりだった」。寝つけなくなったり、腹痛で寝込んだり。自分に腹が立ち、自分で自分をたたくこともあった。

そんな時、たまたまSNSで知ったのが昨年の京都マラソンだ。例年と違い、約1カ月かけて合計でフルマラソンの距離を走ればよい方法で開催された。マラソン経験はなかったが、「自分を変えなきゃ」と挑戦することにした。

家の近所の広沢池や嵐山を走った。長い距離を走るのは初めて。完走する体力も、1人で黙々と走る集中力も、あるのかどうか不安だった。

大好きなスウェーデン出身のDJ、アヴィーチーの曲「Trouble（トラブル）」を聴きながら走った。

I'm still not done（まだまだこんなもんじゃない）

彼はそう歌っている。ただ、実際に走ってみると、イヤホンからの曲は、ほぼ耳に入ってこなかった。体を前に進めることだけに必死だったからだ。「そのくらい苦しくて。もがきながら走っていました」

4日間ほどかけて完走した。「立ち止まっても、また走り出せば前に進める」。そう思えるようになって、将来への不安も少し軽くなった。

あれから1年。コロナ禍は続いている。航空業界への就職は相変わらず難しそう。だが、諦めず、飲食業やホテル業にも興味を持って就職活動を続けている。採用面接や企業研究に追われる日々だ。

そして、今年も京都マラソンに参加。去年よりも短い、3日間で完走を果たした。就活で忙しくても走ったのは、どんな時も前に進み、諦めずに色んなことに挑戦し続ければ、やる気が次々と湧いてくるからだ。完走後の今は「なんでもやってやるぞ」と前向きに励む自分がいる。（吉村駿）